2021 年 9 月 30 日（木）

藤原宮大極殿院の調査（飛鳥藤原第 208 次）

記者発表資料

独立行政法人国立文化財機構　奈良文化財研究所
都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）

※ 現地見学会を 10 月 2 日（土）11:00～15:00 に実施します。新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、定時説明会はおこなわず、随時質問にお答えします。（小雨決行）。
※ 駐車場はありません。

所在地：奈良県橿原市醍醐町
調査面積：1,904 ㎡
調査期間：2021 年 4 月 12 日～継続中

【 概要 】
大極殿の北方には、前期難波宮内裏後殿に相当する建物の痕跡はなく、その造営にも着手していない可能性が高まった。藤原宮大極殿院の構造および造営過程を考えるうえで、重要な所見を得た。

1. 調査の経緯と目的

大極殿院は、藤原宮の中心部に位置し、周囲を回廊で囲まれた東西約 120m、南北約 165m の空間である。その中央には、即位や元日朝賀などの儀式に際して天皇が出御する大極殿がある。

大極殿院については、戦前に日本古文化研究所が大極殿、大極殿院南門、回廊の部分的な調査をおこない、復元図を作成している。奈良文化財研究所は、日本古文化研究所の復元案を検証するため、1977 年度に大極殿北方（藤原宮第 20 次）、大極殿院西門（第 21 次）の調査を実施した。近年は、大極殿院の全容解明を目的として、回廊ならびに内庭の調査を継続的に進めており、2001・2016 年度に東門および東面回廊（飛鳥藤原第 117 次・190 次）、2007 年度に南門（第 148 次）、2009 年度に南面回廊（第 160 次）、2017 年度に回廊東北隅（第 195 次）、2018 年度に北門および北面回廊（第 198 次）の調査を実施してきた。これらの調査により、大極殿院各門の規模と構造が明らかになるとともに、大極殿院内庭は最終

的に礫を敷いて整備されていることが判明した。

2019 年度には、東面回廊に取り付く大極殿後方東回廊を発見したことで（第 200 次）、藤原宮大極殿院と前期難波宮内裏前殿区画との構造上の類似性が改めて注目されることとなった。一方で、2020 年度におこなった大極殿院内庭東北部の調査（第 205 次）では、前期難波宮の内裏後殿東脇殿に相当する建物の明確な痕跡は確認できず、藤原宮大極殿院と前期難波宮内裏前殿区画の建物配置には細部で相違があることも判明した。

これらの成果を受け、今年度は、過去に実施した第 20 次調査の範囲も含めて大極殿北方を広く調査し、前期難波宮内裏後殿に相当する建物の有無を改めて検討するとともに、同部分の造営から整備にいたる過程を詳しく解明することを目的として、調査をおこなった。今回の調査区は、調査区中央部で第 20 次調査区、東南部で第 200 次調査区、東北部で第 205 次調査区と一部重複する。なお、新規に発掘調査をおこなった部分のうち、西側を新規西区、東側を新規東区と呼ぶ。

2. 調査の成果

(1) 藤原宮期の遺構

大極殿後方回廊　調査区東南部において、第 200 次調査で検出した大極殿後方東回廊 SC11540 の西北隅を再検出した。また調査区西南部のほぼ東西対称の位置で、大極殿後方西回廊の東北隅を画する溝を検出した。

基 壇　調査区西南部において、暗褐色粘質土・暗褐色砂質土・黄褐色砂質土からなる版築状の基壇の積み土を検出した。基壇北辺は大極殿後方西回廊の北辺よりも北に張り出すことから、基壇上には回廊よりも梁行の広い建物が存在した可能性が指摘できる。今回の調査では、東西約 8.0m、南北約 4.0m の範囲を検出し、この部分が建物の西北隅にあたる可能性がある。残存する版築状の積み土の厚さは約 0.5m である。これとほぼ東西対称の位置にある第 200 次調査部分では、遺存状態が悪いものの厚さ約 15cm の積み土が残り、この部分が建物の東北隅にあたる可能性がある。

礫 敷　新規西区・東区において、直径 3～15cm の礫を敷いていることを確認した。特に東区の北半において、礫敷の遺存状態が良い。第 20 次調査区では一部に礫が残ることから、同範囲においても礫が敷かれていたとみられる。

(2) 藤原宮造営期の遺構

運 河　調査区東部で再検出した幅 6.0m～7.0m の素掘溝。第 20 次調査時に完掘しており、深さは約 2.0m であることが判明している。藤原宮の造営時に資材を搬入する運河として機能したとみられる。大極殿院の造営に際して、埋め立てられた。

溝 1　調査区北部で再検出した幅 0.2～0.4m、深さ 5～10cm の素掘溝。後述する溝 9 の西方で約 8.7m 分を、東方で約 0.6m 分を検出した。第 20 次調査において、後述する先行四

条条間路北側溝上にまで及んでいたことが判明している。藤原宮中軸周辺の 7.7m 間では、丸瓦を連ね、瓦の内外に拳大の礫を詰めて暗渠とするが、その東西は瓦が据えられておらず、開渠であったとみられる。

溝 2　調査区東南隅で再検出した幅 0.5～0.6m、深さ 0.4～0.5m の素掘溝。後述の溝 3 へと T 字形に合流する。大極殿後方東回廊の北辺を画する。

溝 3　調査区東南隅で再検出した幅 0.5～0.6m、深さ 0.4～0.5m の素掘溝。後方東回廊の西端を画する位置で南北に延び、基壇に沿って西へ折れる。

溝 4　調査区東部で再検出した幅約 0.5m、深さ約 0.2m の素掘溝。南端は溝 3 から分岐する。南北 22m 分を検出し、第 198 次調査検出の SD11516 と同一の溝であることが判明した。第 198 次調査では、SD11516 は大極殿院北面回廊基壇を掘り込んでいることを確認している。埋土に木屑および礫を多く含むことから、礫敷の敷設よりも新しく、大極殿院造営の終盤まで機能していた可能性がある。

溝 5　調査区東南隅で再検出した幅 0.4～0.8m、深さ約 0.2m の素掘溝。溝 3 より新しい。調査区南辺から約 3.3m の位置で溝 2 から分岐し、分岐点から約 3.3m 北で西へ折れる。埋土の下部は木屑を含み、上部は瓦を多く含む。

溝 6　調査区西南隅で検出した幅約 0.5m の素掘溝。後方西回廊の東端を画する位置で南北に延び、基壇に沿って東に折れる。前述の溝 3 と一連の溝とみられる。

溝 7　調査区西南隅で検出した幅約 0.5m の素掘溝。大極殿後方西回廊の北辺を画するとみられる。

溝 8　調査区西南隅で検出した幅約 0.5m の素掘溝。東端が溝 6 に合流する。

土坑 1　調査区東部において検出した東西約 3.8m、南北約 3.0m の土坑。上部を礫敷が覆う。埋土が沈下し、上層の礫敷ごと落ち込む。このほかにも、礫敷に覆われる土坑を複数確認した。

(3) 藤原宮造営前の遺構

先行朱雀大路　調査区中央部において、南北道路とその東西両側溝を再検出した。路面の幅員は、約 14.7m。両側溝はともに素掘溝であり、東側溝は幅 1.6～2.0m、深さ 0.7～1.0m、西側溝は幅 1.6～2.0m、深さ 0.7～1.0m、溝の心々間距離は約 16.5m である。また、東側溝の西に並行する溝 9 を再検出した。幅約 2.5m、深さ約 0.7m の素掘溝である。この溝の北延長部分は、藤原宮北面中門の調査（第 18 次調査）において上記の東側溝と重複し、これに先行して掘削されたことが判明している。これらの溝は、藤原宮の造営に際して埋め立てられる。

先行四条条間路　調査区北部において、東西道路とその南北両側溝を再検出した。路面の幅員は、約 5.4m。両側溝はともに素掘溝であり、南側溝は幅約 1.4m、深さ 0.5～0.6m、北側溝は幅約 1.7m、深さ約 0.5m、溝の心々間距離は約 7.0m である。両側溝は、藤原宮の造営に際して埋め立てられる。

(4) 藤原宮廃絶後の遺構

瓦堆積 1　調査区東部で検出した瓦堆積。溝 5 の北方において分布が密である。第 20 次調査においても、溝 5 の北方に瓦が密に堆積していたことを確認していることから、建物に葺かれていた瓦が藤原宮廃絶にともない廃棄された可能性がある。

瓦堆積 2　基壇の西北部で検出した瓦堆積。藤原宮廃絶にともない、建物に葺かれていた瓦が廃棄された可能性がある。

瓦 敷　調査区西辺で検出した瓦敷。藤原宮廃絶後に設置された条里地割の坪境に沿って、帯状に堆積する。条里畦畔の上面に人為的に瓦が敷かれた可能性がある。

土坑 2　調査区中央部で検出した土坑。東西約 1.0m、南北約 0.9m。埋土に多量の瓦を含む。

(5) 出土遺物

瓦や土器などが出土した。特に藤原宮期の瓦が多い。

3. まとめ

(1) 大極殿院北部では、前期難波宮内裏後殿に相当する建物の明確な痕跡は確認されなかった。

大極殿後方回廊から大極殿院北面回廊までの範囲には、礎石据付痕跡や基壇および基壇の造成にともなう排水溝は検出されなかった。藤原宮の造営では基壇周囲に排水溝をめぐらせることが通例であることから、前期難波宮内裏後殿に相当する建物はなく、建物の造営にも着手していない可能性が高まった。回廊に囲まれた空間であることから、建物を配置する計画があったものの、最終的に着手に至らなかったことも考えられる。

(2) 大極殿後方回廊の中央に基壇建物が存在した可能性が浮上した。

調査区西南部において、大極殿後方西回廊よりも北に張り出す基壇およびそれをとりまく排水溝を検出した。調査区東南部においても、後方東回廊よりも北に張り出す排水溝を検出していることから、回廊よりも梁行が広い基壇建物が両回廊の中央に存在した可能性がある。来年度以降の調査で存否を明らかにしたい。

(3) 大極殿院の造営にともなう排水溝を検出し、造営手順に関する手がかりを得た。

大極殿院の造営にともなう一連の排水溝の変遷過程から、大極殿院北部の造営手順に関する手がかりを得た。特に、大極殿院北面回廊の基壇造成に後出する溝 4 と、大極殿後方東回廊および後方回廊中央の基壇を画する溝 3 が、同時期に機能した一連の溝であることが判明した。北面回廊の造成が大極殿後方東回廊と中央の基壇の造成に先行していた可能性が高まった。

図１　調査位置図

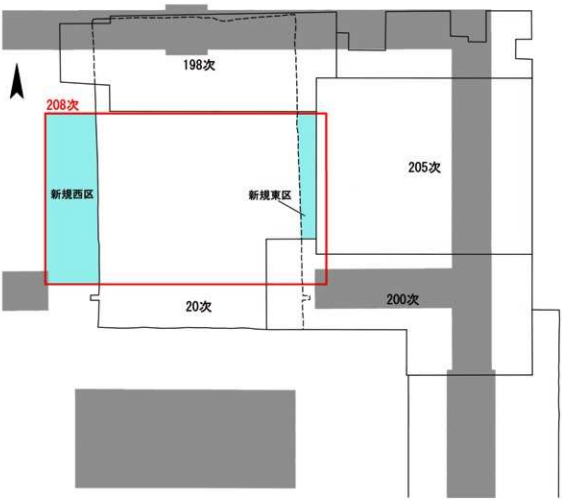

図 2　今回の調査区と既往調査区

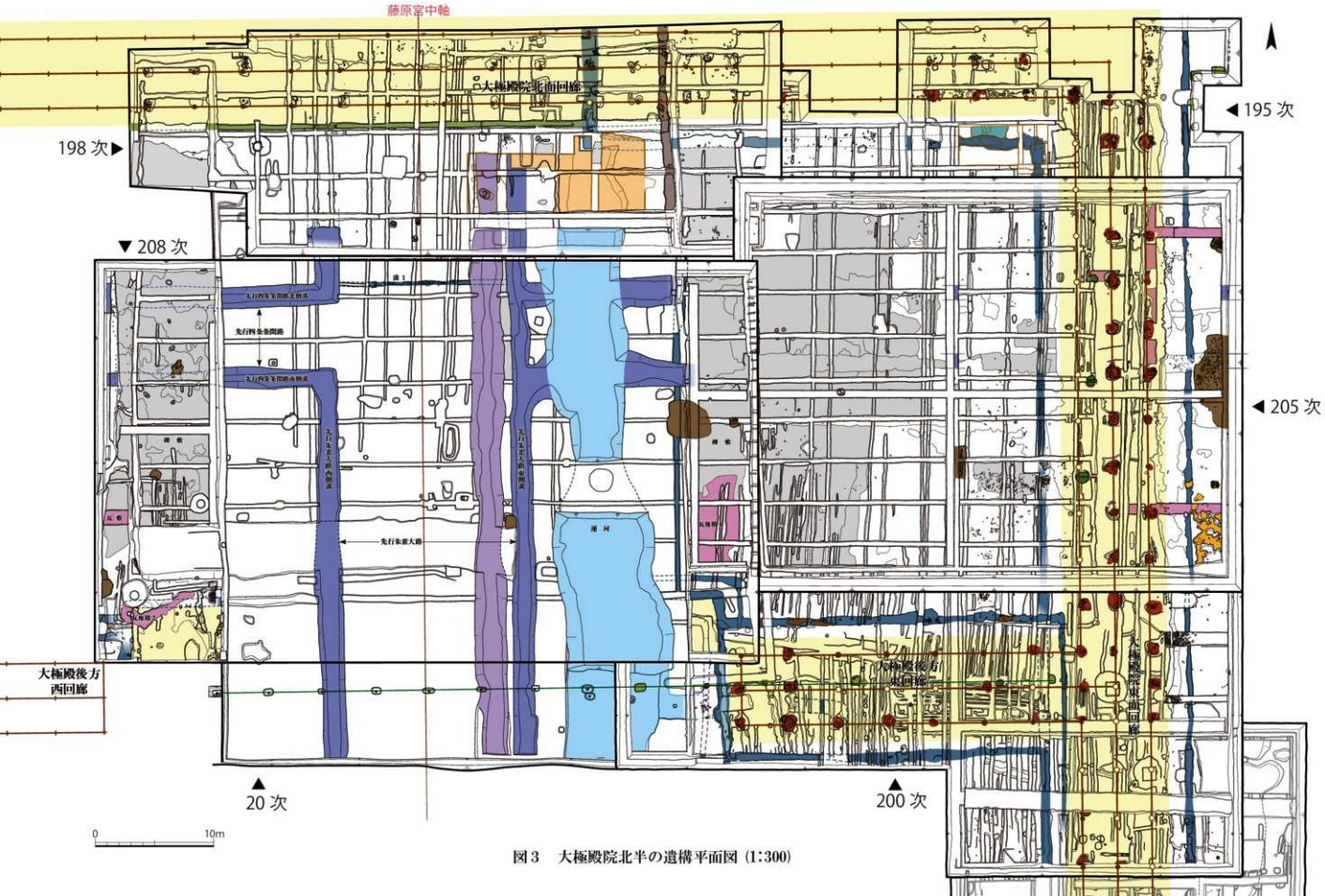

図3　大極殿院北半の遺構平面図（1:300）

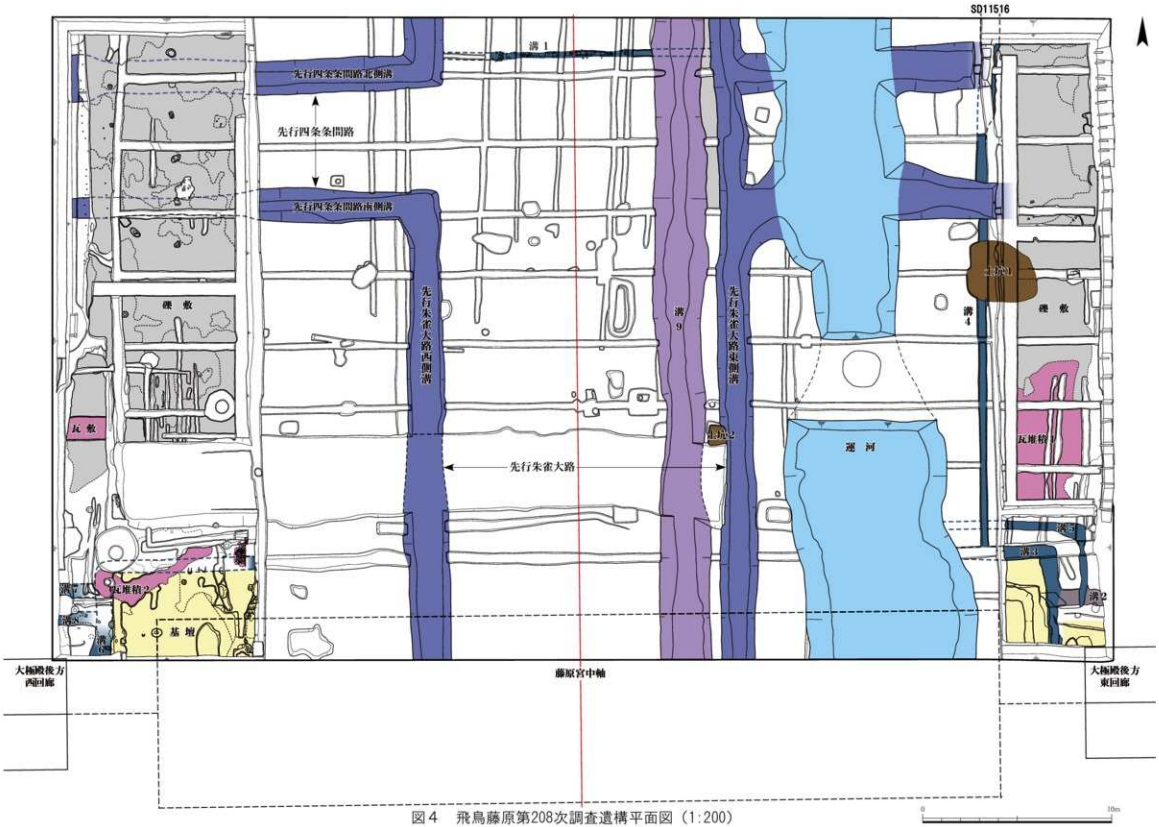

図4　飛鳥藤原第208次調査遺構平面図（1:200）